No.13-1
2013.8.1.発行

紫芳会だより　～輝く先輩達～

読売新聞東京本社　国際部長

岡本　道郎 氏 (高校30期)

1959年生まれ。1983年、東京外国語大学アラビア語学科卒業、読売新聞社入社。
83～87年、秋田支局。87～89年、整理部を経て89年、外報部。90～92年、テヘラン特派員。92～94年、政治部。95～99年、カイロ特派員、支局長。99～2000年、国際部主任兼英字新聞部。2000～01年、ハーバード大学客員研究員。02～03年国際部主任。03～07年、カイロ支局長。07～08年、国際部次長。08年～11年、アメリカ総局長。11年10月～12年5月、解説部長。12年6月から国際部長。

子供の頃から、史劇や西部劇、戦争映画などハリウッドの洋画が好きで外国のことに関心は強い方でしたが、**「海外特派員になりたい」とはっきり思ったのは、大学時代**です。**専攻はアラビア語**だったのですが、当時（1978年）、叔父が毎日新聞の北京特派員をしていて、「遊びに来なさい」と中国に呼んでくれたのです。今のように、気軽に中国に旅行に行けるような時代ではありませんでしたが、駐在員は3親等までは「招待」することができたので、私の生まれて初めての外国旅行が実現しました。せっかくだからと中国語のイロハは勉強していきました。北京の叔父の家に泊めてもらいましたが、叔父の留守の間、退屈しのぎに「何か面白そうなものはないか」と家の中をがさごそと探していると、カセットテープが何本かありました。その中の1本を何気なく聞いていると、何か長い文章をゆっくりと読み上げるような重々しいアナウンスが録音されていました。**「マオ・ツォ・トン・・・」**。中国語初心者ではありましたが、どうも**毛沢東が死去した時（1976年）の国営放送の発表**だということがわかったんです。叔父はスピーカーの前にカセットレコーダーを置いていたようで、周囲の音も入っていたのですが、突然、リーンと電話がなって、叔父が電話口で「ああ、今から市内の様子を送ります」としゃべっていたのです。なるほど、東京の本社と毛沢東死去に関する原稿を送る打ち合わせをしているんだな、とわかりました。その瞬間、**新聞記者ってすごい**って思いました。**海外特派員というのは、「歴史のページがめくられるときに、その場にいられる、という仕事なんだ」**と、初めて具体的なイメージがわいたのです。

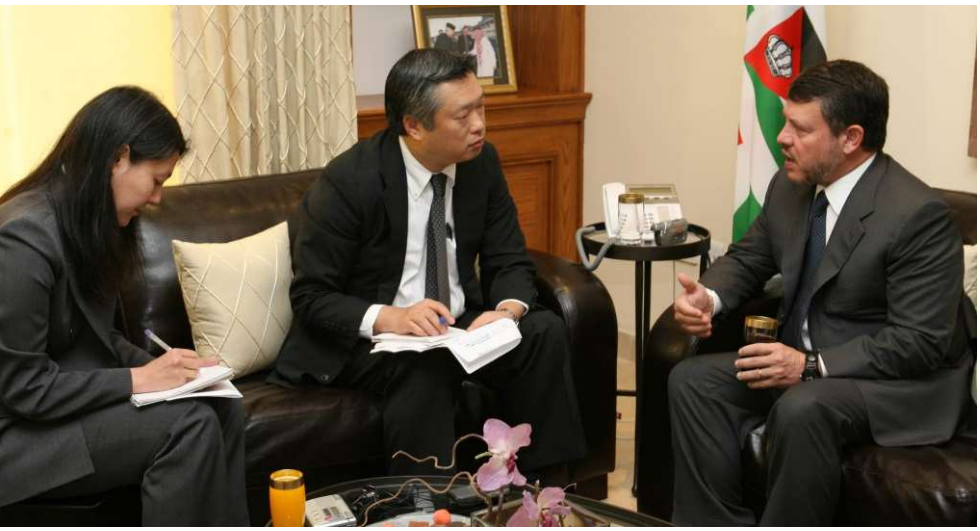
「自分も将来、新聞記者になって歴史の1ページに居合わせてみたい」---。その思いは、4年生のときにエジプトのカイロに留学した際（1981～82年）、アラブ諸国で初めてイスラエルと単独和平を決断した当時の**サダト大統領が、軍事パレード中にイスラム過激派に暗殺される事件に遭遇**し、さらに強くなりました。81年10月6日、ペンションの部屋でパレードのラジオ実況放送を聞いていたら、突然、銃声が乱れ撃ちのように響き、実況はストップ。聞こえてくるのは騒然とした叫び声だけです。今のように、CNNもインターネットもないので、何が起きたかわからない。無我夢中で、ナイル川にかかる橋をわたって、対岸の大統領官邸の様子を見に行きました。ひっきりなしに行き来する警察車両、傍らを兵士を乗せたトラックの隊列が過ぎていきます。その様子を市民たちが、不安いっぱいの表情を浮かべ遠巻きに見ていました。結局、現場では何が起きたかわからなかったのですが、夜のテレビニュースで、サダト大統領の隣に座っていて自らも負傷した当時のムバラク副大統領が、暗殺の事実を発表しました。その夜が、つい2年前、「アラブの春」で大統領の座を追われたムバラク氏の約30年にわたる「治世」の始まりであったわけですが、**アラブ随一の政治大国の大統領が凶弾に倒れるという世界的大ニュースの場にいた**ということ自体にとてつもない興奮を覚えました。

1983年、幸運にも読売新聞社に入ることができ、まず秋田支局に赴任、新聞記者のイロハを勉強しました。交通事故、火事、地震、窃盗や殺人事件・・・いつ（When）、どこで(Where)、だれが(Who)、なにを(What)、なぜ(Why)、どのように(How)、いわゆる**「5W1H」を調べ、確認し、原稿にする**という基本を4年半、地方の現場でたたきこまれました。

87年に東京本社に戻り、見出しをつける整理部を経て、希望が叶い、国際報道に携わる外報部（現国際部）に配属されました。**特派員としての最初の赴任地はテヘラン**。79年の革命以来続く、イスラム教指導者による政治体制の下、飲酒が禁止され、外国人女性でも季節を問わずコートとスカーフを着なければならないなど、何かと制限が多い生活は大変でしたが、その独特な国柄は興味尽きることなく、知れば知るほど味わいがありました。また、イランは四季がしっかりとある美しい国で、人間もつきあってみると情に厚く、実はお酒もひっそりと飲めたり、ホームパーティーでダンスしたりと楽しい部分も結構あって、2年の在任期間はあっという間に過ぎました。ただ、何と言っても、**90年8月、サダム・フセイン政権のイラクがクウェートに侵攻**、その後、米国主体の多国籍軍がクウェートを解放した**「湾岸危機・戦争」を取材**できたことは、記者として大きな体験でした。米軍が占領イラク軍への攻撃を開始した91年1月17日の湾岸時間未明、アラブ首長国連邦アブダビのホテルで寝ていたところを東京本社からの電話でたたき起こされ、**「何でもいいから原稿をくれ！」**と言われました。真夜中で何もわからないまま、必死にラジオを聞いたのですが、亡命クウェート放送のアナウンサーが**「解放戦争が始まりました！神は我らとともにあります！」**と絶叫していました。この言葉を中心に原稿を電話で吹き込んだのを覚えています。この記事はこのアナウンサーの言葉がそのまま**特大縦トッパン見出しとなって、社会面を飾りました**。アラビア語が初めて役に立った瞬間でした。

次の赴任地は待望のカイロ。学生時代の留学以来13年ぶり、妻と小さかった息子2人の家族4人で、95年から99年まで4年半勤務しました。シリア、ヨルダン、レバノン、イラク、トルコ、サウジアラビア、イエメン、アラブ首長国連邦、アルジェリア、チュニジア、イスラエル、パレスチナ（ヨルダン川西岸、ガザ）・・・**広い中東を飛び回りました**。95年のイスラエルのラビン首相暗殺事件、任期中常に追い回されたイラクの大量破壊兵器査察をめぐる神経戦と米軍のバグダッド空爆が主なニュースだったと思います。その間、レバノン南部の前線を取材してベイルートに帰る途中、交通を遮断しようとイスラエル海軍艦艇が幹線道路を砲撃する合間を縫って、**タクシーで全速力で無灯火のまま強行突破**したり、レバノン東部の町でイランの銀行支店をアポなしで取材していたら、親イランの**イスラム教シーア派組織ヒズボラのメンバーに連行、拘束**され、下手なアラビア語で必死に**「以前、テヘランに勤務していて、イランが好き」と言い続けて何とか解放**してもらったり・・・など、危ない目にもあいました。今となっては、思い出話ですが、当時はまさに掛け値なしに、**「死ぬかと思った」**状態でした。

カイロから帰って、英字新聞部勤務後、**ハーバード大の日米関係プログラムという研修コース**に研究員として1年間出してもらったのも貴重な体験でした。カイロ特派員時代、アラビア語を勉強した人間として、どうしてもアラブ民族主義や反米思想に共感するところがあり、そのおかげで、アラブ的思考にある程度近づくことは出来たのですが、中東に大きな影響力を持つ米国の戦略をしっかり分析することなく、いろんな原稿を書いていたため、やはり記事としてのバランスや深みを欠いていたからです。 ハーバードでは、米国の中東戦略を研究テーマに選び、多くの本を読んだり、専門家にインタビューしたりして、勉強しました。この経験は、**2001年の9・11同時テロ**を機にまったく次元が異なるものとなった世界情勢、特に**2003年3月のイラク戦争**を理解する上で大いに役立ったほか、同年8月から4年にわたった2度目のカイロ特派員生活にとっての大きな糧となりました。**アメリカを知らないと中東も世界も語れない**からです。



ヨルダンのアブドラ国王と会見する岡本氏

支局長として赴任した2度目のカイロ時代は、ほぼ2か月置きに、フセイン政権崩壊後の混迷のバグダッドへ出張する日々が続き、ほとほと疲れましたが、まさに、**中東が大変動するその現場に身を置くことが出来た**のは最上の喜びでした。町中の通りの先で銃撃戦が起きたり、宿舎の隣にあるホテルの壁面に迫撃砲が直撃、雷鳴のような爆発音にベッドから跳び起きたり、いろいろ経験しましたが、**一番印象に残っているのは、バグダッド陥落後、逃走、潜伏していたフセイン大統領の拘束**です。2003年12月14日の日曜日、日本での新聞休刊日だったため、同僚と連れだってバグダッドの中古本市場をぶらぶら歩いていたのですが、遠くでタタタタタという自動小銃の連射音が聞こえました。「また撃ち合いか。いつまでやってるんだろうねえ」などと同僚と話しながら、さらにぶらぶらしていましたが、だんだん、その「タタタタ」が近くなり、たくさんになっていきました。歓声も聞こえます。「何かあったのか？」。市場の小道でラジオを囲んで笑っていた住民が叫びました。**「サダムが捕まった！」**。「まじかよ・・」――仰天して、事務所にとって返し、原稿を書きまくりました。CNNテレビに映ったひげもじゃで憔悴しきった独裁者サダム・フセインの変わり果てた顔は衝撃的で、今も忘れません。**歴史がまた、自分の前で動きました**。その後も、テロの恐怖を克服してイラク人たちが初めて自分たちの意思を票に託した自由選挙、その後の治安悪化と流血の宗派抗争など、**イラク戦争後の激動を取材**しました。日本人が武装組織に誘拐された事件も衝撃でしたが、**イラクの宗教指導者から、「交渉が成功し、解放される」という情報を取ったとき、電話口で「シュクラン！（ありがとう）」と連呼**したのを覚えています。アラビア語を勉強してよかったと一番思った瞬間でした。

カイロには結局、単身で4年間。自炊の腕も上がり、カレーやスパゲティ、フライドチキンなどを作って同僚や友人を家に呼び、エジプト産のビールや出張先から買い込んできたレバノン、イスラエル産のワインでよくホームパーティーを開いたのもいい思い出です。

特派員生活の最後は、2008年6月からのワシントン勤務でした。11月の大統領選で、民主党の**バラク・オバマ上院議員が勝利、09年1月20日、第44代、黒人では初めての合衆国大統領に就任**しました。ワシントンの連邦議会議事堂の演壇から、「米国の再生」を高らかに宣言したオバマ氏の就任演説を、厳寒の中、巨大な緑地帯ナショナルモールを埋め尽くした200万人の国民とともに聞きました。オバマさんの姿は遠くて豆粒くらいにしか見えませんでしたが、イラク戦争後の米国に救世主のように登場、まさに**歴史に選ばれた若き大統領の晴れ姿は生涯忘れない**でしょう。

余談ですが、08年の夏、まだブッシュ大統領だったころ、**ホワイトハウスに日本メディア6社の支局長が招かれ、大統領への合同会見が実現**したことがありました。もちろん、私も、イラク戦争の反省点など真面目に質問をしたのですが、各社の質問が一巡したとき、ブッシュさんが千葉ロッテマリーンズの監督だったボビー・バレンタイン氏について言及し、「前回、日本に行ったとき、ボビーは空港でサダハル・オー（王貞治氏）と一緒にいたんだ（the last time I was in Japan Bobby was at the airport with Sadaharu Oh）」と言ったので、つい、何の意識もせずに、**「オー（Oohh）！」**と言ったところ、ブッシュさん始め、報道官らスタッフになぜか大受け。**アメリカ大統領にだじゃれをかます**というあり得ない体験もできました（笑）。

結局、ワシントンには3年4か月勤務して帰国しましたが、海外特派員生活は、ボストンの研修も入れて結局、14年9か月にわたりました。その間、単身生活は約8年半。テヘラン時代に生まれた長男はもう、大学3年生です。家族と過ごす時間はだいぶ削ることになりましたが、**激動の中東とアメリカのニュースを追い続けた特派員人生に悔いはありません**。

今は東京本社の国際部に戻り、仕事をしています。実際に現場に行ったり、自分で記事を書いたりということはなくなり、事務的な仕事に追われる毎日ですが、やはり国際報道にかかわる仕事をいまだにさせてもらっているのはありがたいことだと思っています。

日本という国、そして日本人が内向きになっていると言われます。でも、国土も狭く、資源も乏しい日本は、世界とお付き合いしないと生きていけない国なのです。そのためには、世界のこと、世界に生きる人々のことを知らないといけない。だから国際報道は重要なのです。特派員として経験したこと、思ったことをとりとめもなく書いてきました。一個人の体験談がどれだけ意味を持つかはわかりませんが、立高生の皆さんが、世界と国際報道に少しでも興味をもつきっかけになってくれればうれしいです。

ホワイトハウスでブッシュ大統領と握手する岡本氏
この後、大統領相手に駄洒落をかます!?